

資料 2

「あの家から嫁もらえん」

③

神の川 永遠に
イ病勝訴50年

編集委員 宮田求

日本が高度経済成長に突き進む1960年代初頭のことだ。

富山市任海の江添久明さんが、自宅近くの田んぼに清めの塩をまいていた。「田を荒らして申し訳ありませんでした」。心の中で頭を下げ、手を合わせた。イタイ病で苦しむ母、チヨさんの回復を念じ、わらにもすがる思いだった。

後にイ病訴訟の原告に加わるチヨさんは当時50代後半。足に針で突かれるような痛みが生じ、入退院を繰り返したが、症状は全身を削られるような激痛に変わっていった。

「このまま命を取られる」。苦しみ母親の様子を見かね、江添さんらが頼ったのは宗教者だった。相談すると、こう返ってきたという。「あなたたちの田直しが、田の神の怒りに触れた。鎮めなければなりません」

田直しとは、農家がいやすいように、細かい田をならし、1枚に区画整理する

差別と偏見

作業。「他の農家でも普通にやっとなる」とながら、「」と思ったが、その「お告げ」に従った。

イ病は、耐えがたい激痛を伴って患者を襲う。だが、苦しむのは本人だけではない。不安、葛藤、経済的な困窮、そして周囲からの差別と偏見…。そのやいばは家族を巻き込み、追いつんでいった。

江添さんが神頼みに救いを求めていたころ、イ病の原因を神岡鉦山(岐阜県神岡町|現飛騨市)から流れ出たカドミウムとする鉦毒説は、まだ定着していない。もちろん、病のメカニズムも分からず、有効な治療法はなかった。

そんな中で、イ病は「業病」と呼ばれていた。「前世に悪い行いをした報い」という意味合いがある。

婦中町(現富山市)や、江添さんが暮らす同市新保地区など、神通川兩岸の特定エリアに患者が集中したことから「風土病」とも言われた。

「病気がうつるかもしれないから、あの家から嫁をもらわれんし、嫁にも行かせられん」

「患者がいる家では茶も飲まれん」そんな陰口が飛び交った。「栄養不足と過労」を原因とする説が唱えられた時には、「嫁をこき使って満足に食事もさせん。ひどいうち家やちゃ」と、さげすみの目で見られる家庭もあったという。

神岡鉦山から流れ出たカドミウムが入り込んでいたこの水田。その汚染がイ病の原因だと分かっている人は、神岡鉦山にすがる人もいた(林春希氏撮影)

一度、人々に焼き付いた差別と偏見は簡単に消えない。鉦毒説を真っ先に打ち出した萩野昇医師が開業していた萩野病院(富山市婦中町萩島)の現院長、青島恵子医師(71)も、そうした根深さを実感している一人だ。

2010年代に亡くなったある女性患者の治療に当たっていた。しかし、その患者は少なくとも20年間にわたり、自分がイ病の認定患者であることを家族に隠してきたという。

患者は生前、青島医師に「(イ病と)認定された時、知人から心ない言葉を投げ掛けられ、嫌な思いをした」と話したことがあった。「家族を巻き込みたくない」という強い思いがあったのでしよう。青島医師は患者の心情を、そう推し量った。

「業病」「風土病」と呼ばれた時代から半世紀もたった「最近」の話である。

イ病という「未知の病」への不安、恐れが差別や偏見を生む。その構図は、昨今以降の新型コロナウイルス下での日本社会のありようとも重なって見える。

コロナ感染 相次ぐ中傷

新型コロナウイルスの感染が拡大した昨年以來、感染者への誹謗中傷や差別が各地で相次ぐ。

全国の法務局に寄せられたコロナ絡みの人権相談は昨年2月から今年2月まで計約2300件。PCR検査を受けただけでアルバイト先を解雇されたり、感染したことを上司に広められたりするケースがあった。

北日本新聞の取材で、県内の深刻な事例も判明している。昨春に県内最大のクラスタ(感染者集団)が発生した介護施設には、「富山県

受診控えで拡大危惧

差別や偏見があると、感染疑いのある人が受診や検査を控えるようになり、治療機会を失うばかりか、新たな感染拡大につながるなどの危惧も浮上している。

から出て行け」「感染者を(他の施設へ)移すな」などの嫌がらせ電話があった。1人暮らし高齢者が治療後、近隣住民からサポートを受けられなくなる事例もあった。重症化すると命を失ったり、後遺症が残ったりすることもあるコロナ感染症への恐怖感が背景にあるとみられる。

未知のウイルスや病がふり出す差別の構造。それによって生み出される愚劣さが今、世間に漂う。

この社会に染み付いた病根とどう向き合うか。私たち一人一人に鋭く問われている。

【隔週日曜掲載】

